

マンダラ・コラージュ —自己理解の可能性—

青木 智子

文京学院大学 保健医療技術学部 作業療法学科

要旨

カパチオーネによって提案されたマンダラ・コラージュ（円形台紙コラージュ）を集団個人法で実施し、後にシェアリングを行う意義について事例を通し、作品の内容分析・形式分析から言及した。『現在の私』と『10年後の私』のコラージュ制作は学生自らの自己理解を深め、後の言語を用いたシェアリングは他者を理解することのみならず、ほんやりとした現在の生活に目を向けさせ、自身の問題点を明らかにし、将来に向けて何をすべきかを切片を通した視覚的理解をもうながす。さらには、自身の客観視を可能にすることも明らかにした。

同時に、円という形態が、個人の思いの表現にもたらす力についても言及した。

キーワード

コラージュ療法、マンダラ、自己理解、元型、表現

はじめに

コラージュは、1920年代に誕生した美術技法として広く知られ、後に、1970年代にアメリカの精神科作業療法でレクリエーション、および評価法として治療的に導入された。日本では1990年頃から、コラージュ療法として心理療法・カウンセリング場面で用いられ、その汎用性から自己理解・他者理解等の自己開発、職業訓練、心の健康や人間的理解に役立つ開発的カウンセリングなど、広い領域で活用されている。

コラージュ療法は特に定まった制作方法はなく、クライエント（以下、Cl.と表記）の表現の自由の保障が重視され、教示方法は実施者の目的から工夫される。これは、箱庭療法の原型 World technique が人格検査 World test として標準化され、結果的に治療機能を喪失したことを教訓

に、コラージュ療法の治療的意義を重視する考えに由来する（河合1982）、（岡田1984）、（木村1985）、（杉浦1994）。つまり、コラージュ療法はセラピスト（以下、Thと表記）が明確な目的、適切な実践計画を構築しさえすれば、様々な手法・方法で実施可能である（青木2000）。

そのため、近年の研究動向も従来の神経症、精神病、不登校、発達障害などへの心理療法としての導入に加え、末期がん患者（中原2000）、療養施設に長期間入所し、言語障害を有する脳性麻痺、先天性ミオパシーなどの重症心身障害者（西山2000）、外傷性脳損傷に対するリハビリテーション（平・前原ら2003）、デイケアでの要介護高齢者に対するアートセラピー（山崎・柳ら2008）、（原2006）、（青木2005, 2008）、また、学校や研修等、自己啓発（佐藤2003, 2004）（谷口・原野2004）と、対象領域を広げている。

さらに、短時間の面接にも有効なハガキコラージュ（藤

掛 2007), 輪番制コラージュ (豊嶋・久米川 2005), 画用紙すなわち台紙の使い方や色, 枠が制作に与える影響 (岸井 2003), 台紙の形の検討 (佐藤 2004), (青木 2008, 2009) など新たな手法も試みられている。また, 近年, 制作と脳内活動の検討 (近喰・河野ら 2008) など医学的視点からの研究も活発化している。

制作時の素材をハサミで「切り抜き」、あるいは手でちぎり、台紙の上に乗せ位置を考え、糊で「貼りつけ」るなどのコラージュ・アクティビティは心理的退行を促すとされ、これは遊び的な感覚が生じたため (杉浦 1991) と説明される。Winnicott (1971) は「遊ぶことは本質的な満足を与える」「遊ぶことはそれ自体が治療である」と述べたが、コラージュ・アクティビティの制作そのものは自己治療的意義を有すると考えられよう。

また、Singer (1990) は、遊びは、時に自然に喪失や失意の体験を清める働きをすると主張する。自分の気に入る・気になる切片という素材を媒介に、その体験をコラージュという作品に象徴化し、儀式化 (ここでは制作者が円という与えられた枠内にコラージュという美術表現を行うこと指す) し、他者と共体験 (制作後のシェアリング) できるものに構成する (自らのコラージュを振り返る) 作業、コラージュ・アクティビティ、すなわち遊びは、制作者が自覚する、あるいはしていない情動や体験を促すと理解できる。

さらに、コラージュを完成させた後にグループで実施されるシェアリングは、制作によりポジティブに変容した気分を維持し、定着させる役割を持つ (青木 2001) と指摘されている。ここではこれらの研究背景を踏まえ、新たな手法の1つである、集団個人法で実施する円形台紙を用いたマンダラ・コラージュのワーク (特にコラージュ制作に主眼を置くものとする) と意義の検討を目的とする。ただし、本研究はあくまで探索的研究として、事例と自由記述から有効性に言及するものである。

1. 本研究の目的—自己開発と円形コラージュ

他者理解・自己開発を目的としたコラージュの制作、およびシェアリング (杉浦ら 1996, 1997), (青木 2001) の先行研究で得られた知見は、コラージュ作成での心身ストレス解消、メンタルヘルスへの好影響であった。制作では与えられたテーマをコラージュで表現するため、

- ① イメージを切片から具現化し (イメージの放出)、
- ② 各々のイメージを見、語ることで共有へと深まり、(他

者とのイメージの共有)、

- ③ 最終的に、他者のイメージを自己へ取り入れ、自我の変容、充実、拡大へと到達するプロセスが自己啓発に関係すると示唆されている。

本研究のマンダラ・コラージュ (円形コラージュ) は、アメリカのアートセラピスト、カルパチーノ Capacchione (1996) が、自己理解を目的に提唱したもので、『現実生活』、『10年後の私 (将来の私)』をテーマにコラージュ制作を行うものである。円形台紙での試行については、後の考察で触れるが、カルパチーノはマンダラ・コラージュを、

- ① 漠然とした「現在の自分の生活」や「未来の自分」に対するイメージが、コラージュ制作で作品として具体的に表現される
- ② 制作後のシェアリングで発表者や聞き手が、さらに自己理解・他者理解を促す
- ④ 自己の未来イメージの明確化につながる

と説明している。これらの前提に基づき、本研究では、3つの事例を取り上げ、以下の仮説から検討を行う。

1. コラージュ作品の理解・解釈のみならず、漠然とした現在の生活を見直し、自己評価、自己洞察を経て、将来のビジョンを作品から理解することを目指す。
2. 制作後にシェアリングを実施し、作品を自らの言葉で言語化し、他者の意見や感想を得て、さらに自己洞察を深め、未来・将来に向かって自分がすべきことについて気付きを促す。また、他者と自己の違いや個性を知り、他者を理解する努力、思いやる気持ちの気付きを促す。
3. 円という画用紙の形態がもたらす心理的意義について検討する。

2. 方法

2.1 対象者

「栄養教諭」の教職免許取得を目指す女子大学生・女子短大生 20 名。

2.2 場所

大学内の一般教室 (40 名程収容可能) を使用する。

2.3 実施期間

教職課程必須科目「教育相談の研究」の授業時間内にカウンセリングの1技法の実践、さらには自分を知るためのワークと説明し、実施した。マガジン・ピクチャー・コラージュ法、集団個人法を用いる。制作所要時間は 60 分程度。

1週目には「現実生活・現在の私」の作品を作成、翌週「10年後の私(もしくは将来の私)」というテーマで制作させる。各回ともに制作後、シェアリングを実施した。2作品が完成した後に、さらに個人でまとめとしての振り返り・自由記述を行い、最後に全体として、参加者全員のまとめを行う。

なお、被験者には作品が研究対象として用いられる可能性があることを作業終了後に説明し、合意の得られた作品のみ回収した。

2.4 実施方法

- ① 学生1名につき1枚の4つ切画用紙を配布し、円形に切るように指示し、
- ② 『現実生活』というテーマで制作する。なお、カルパチーノの手法に基づいて、画用紙の中央には自分自身を表す写真や絵(または自分の写真)を貼り付けるよう指示する。作成終了後、テーマにサブタイトルをつけ(つけなくともよい)、作品の説明や感じたことを自由に記述させる。
- ③ 4名のグループでシェアリングを行う。シェアリングのルール(杉浦1997, 1999)として、1名の持ち時間を3分とし、自分の作品を説明する。説明が終了してしまった場合は、グループの他者から意見、感想、質問などを受ける。否定的な質問は避け、作品の良い部分を指摘するように注意を促す。また、発表者は、答えたくない質問は、ノーコメントできる旨を説明する。
- ④ 1週間後に、同様のプロセスで『10年後の私(もしくは、将来の私)』というテーマで制作し、同様のプロセスでシェアリングを行う。
- ⑤ 引き続き、2作品が完成した後、各自に
 - 『現実生活(以下、「現実」と表記)』『10年後の私(以下、「10年後」と表記)』では何が表現されているのか考える、
 - 『現在』の私に足りないもの、
 - 『10年後』に表現されているもの、
 - 『10年後』を見て、今後10年間努力しなければならぬと感じる・考える点、
 - シェアリングを通して、他者の作品と比較して考えたこと・感じたことなど
 以上の5項目について自由記述させた。

2.5 使用するもの

4つ切画用紙、糊、はさみ、ペン、雑誌は各自、日頃愛

読しているもの持参するよう告知した。また、持参しない、忘れた学生がいた場合のために実施者が複数冊を準備し、自由に使ってもらった。なお、学生間の雑誌の貸し借りも認めている。

2.6 結果と分析

コラージュ『現在』『10年後』をおのおの作成した後に作品の説明や感想などを自由記述させた。さらに、グループで交わされたシェアリングでのやりとりを観察、内容を分析した。

3. 結果—事例検討

以下の記述は、学生が記載したものの引用である。ただし、個人を特定できるものなどは記述表現などに手を加えた。

<事例1>

『現実—(サブテーマ)大好きなものに囲まれたい』(図1)好きなものに囲まれたい願望を表現した。犬は彼氏。ミッキーマウスが自分ではあるが、実は作品の裏が表だったりする…裏は1人ぼつんという自分。半笑いの自分。その笑いは本当の笑顔なのか、嘘なのか自分でもわからない(図2)。

『10年後』(図3)結婚しているが、専業主婦でなくバリバリ働いている。目立つ大きな足は「美脚」で、美しくいたいという意味。キティちゃんは子供。天使っぽい子供が2人欲しいから。時計は夫と2人の時間を刻むということ。下の野菜は食に関する仕事をしていきたい思いと、健康を維持する意味での栄養バランスを示している。海外旅行に行きたい、車が欲しい。

<振り返り>

シェアリングをして、自分の作品は隙間だらけなのに他の人は白いところがなく、背景がきっちり貼ってあったり、四角く切り抜いたり、はみ出しがあり驚いた。自分を表すものがキャラクターや物でなく、ごはんやグラス、水だったり、似た表現の人もいて面白かった。私は他の人と違って、裏も貼り付けをして病んでいるのではないかと思ったが、メンバーや先生にいろいろな面を持っているのでは、と言われて嬉しかった。現実から離れたものを貼る人、現実的な表現をする人がいてユニーク。

自分の作品は『現実生活』は子供っぽく、ポップな感じなのが『10年後』では大人らしくスタイリッシュ。現実



図4 事例2『現実生活』



図6 事例3『現実生活』



図5 事例2『10年後の私』



図7 事例3『10年後の私』

<事例3>

『現実』(図6)「現在の私が好きなもの」と置き換えて作成した。食べること、美しい料理を見ること、光るもの、外国の風景、和服、和食など好きなものを選んだ。自分の大好きな雑誌に載っている女性はとても好きで、私もこんな美しい顔とボディが欲しい。中央の自分をイメージさせるものに半透明の筆を持った女の子を選んだ。まだ学ぶことが沢山ある私をこの女の子として、筆の先にあるグリーンのもやもやを学ぶものと例えた。同じ緑でも沢山の種類があって、その色が学ぶべきたくさんのこと。半透明の私はそれを吸収して色をつけていきたいと考えている。

『10年後』(図7)「バラのような人生を送りたい」がサブテーマ。こんな部屋に住み、ワインを飲みたい。住んで

いるのは日本でなく、きれいな外国の街。食器が好きなので、10年後も食器を集め続けたい。こんなきらきらした指輪が欲しい。動物(ねこ)は、その家庭によって顔つきが変わるといっているので、こんな風に幸せそうに寝ているねこは、きっと幸せな家庭で暮らしているはず。私もそんな家庭を築きたい。中央のやや上にあるハートが自分を示している。

<振り返り>

シェアリングで、個々の人間を改めて意識した。余白のある人、ない人、切り方の違い。これだけの人がみんな違ったコラージュを作るのだから、みんなが違う価値観を持ち、共存していれば、人間関係で悩むのは当たり前だと思うけ

ど、それ以前に共存できていることがすごいと思った。シェアリングでは、一目で解るほど10年後の方のカラーージュが大人びていた。風景や生物、人物は誰の作品にも含まれており、両方とも作成したのは同一人物なのに現在と未来がこれほど違うことに驚いた。自分の作品を現在と未来で比較すると、好きなものには変化がなさそうである。ただし、将来は外国で生活したいという気持ちが強く表れているので、日本の歴史の勉強やしなければならぬことが沢山ある。がんばる!!

4. 考察

4.1 仮説の検証

対象者の作品、および自由記述から、漠然とした現在の自分の生活や未来の自分に対するイメージが、カラーージュ作品として具体的に表現され（ノン・バーバル）、②制作後のシェアリングで発表者が作品を説明（バーバル）し、聞き手の共感や質問がさらに自己理解を促がし、③『10年後の私』では自己の未来イメージが表現されるとともに、『現実生活』の作品を振り返ることで、繰り返し、現在の自分に対する洞察が深まる、④将来に向けて自分がしなければならぬこと、すべきことが明確にされる、であろうことが示された。

カラーージュ制作後のシェアリングは、他者と自分の切り貼りなどの形式・内容表現の違いのみならず、考え、理想、思いなど、他者との価値観の違いが実感されたようであり、さらに他者の表現や気持ちを大切にすることについての記述が多く見られた。また、ノン・バーバル表現の可能性、他者の個性に目を向けることができたという感想も見られた。

4.2 円の持つ意味—マンダラ・カラーージュの可能性

マンダラ・カラーージュの提唱者は制作の意義を「曼陀羅は、人の内面および外面生活を目に見える形で表現する場合に適した方法である。中心点から放射状に広がる模様を基本とした、曼陀羅の構造そのものが、自分を人生の中心に置くという意図の下に考えられたものである—ここでは、自分の姿の全景を眺め、健康的な生活の青写真をデザインするための道具として、曼陀羅を用いる（Capacchione 1996）」と説明する。

マンダラはサンスクリット語で「魔法の円」を意味するが、円すなわち、マンダラを自己の統合、個性化のための道具として、心理療法に最初に取り入れたのがユングである。

—「円を描いて封ずるという行為は、特殊な秘密の意図を抱いている人間のだれもが用いてきた大昔からある魔術的手段である。彼はこうすることによって、秘密の上に孤立しているすべての人間を襲うところの、あの外部から迫り来る魂の危険に対して身を譲るのである（Jung 1976）」

1928年、研究に行き詰ったユングがイメージのままマンダラを描いている頃ⁱ、ヴィルヘルムから『黄金の華の秘密』の原稿の注釈を依頼された。その原稿が、ユングの研究を後押しするような内容であることに、彼は衝撃を受ける。さらに、マンダラがケルト文化、ナバホ族の砂絵、ヒンズー教、チベット仏教のみならず、ヨーロッパの大聖堂でバラ窓のデザインにすら用いられる普遍的なものであると指摘し、マンダラの意味の説明を試みる。

—「多くの場合、マンダラ図形は、4という数に向かうはっきりした傾向を示す花、十字、輪の形などで示される。このようなマンダラは、プエブロ・インディアンが儀式のために用いる砂絵にも見出される。最も美しいマンダラを持っているのはやはり東洋、とりわけチベット仏教である。われわれの書物に見られる象徴は、これらのマンダラの中に示されている。私は精神病患者ⁱⁱの多くにも、またその関連について全く何も知らない人々の場合にも、彼らがマンダラを描くことを見出したのであった…患者自身はマンダラ象徴の意味について、ほとんど何も述べることができない。彼らはそれに魅惑されているだけであって、彼らの主観的な心の状態との関連において、それらが何か表現力豊かで有効であることを見出しているのである（Jung 1980）」

—「マンダラとは…精神の像…であって…1つとして同じものはなく、個々人によって異なる。また僧院や寺院に掲げられているようなマンダラは大した意味を持たない。なぜならそれらは外的な表現にすぎないからだ。真のマンダラは常に内的な像である。それは心の平衡が失われている場合か、ある思想がどうしても心に浮かんでこず、経典を紐解いてもそれを見出すことができないので、自らそれを探し出さなければならぬ場合などに、（能動的な）想像力によって徐々に心の内に形作られるものである（Jung 1976）」。

ユングは、元型としての神のイメージは意識と無意識を媒介する力であることから、個性化過程の核心的要素であると考え、歴史的に（ふつう四位一体構造を持っている）マンダラが、神の本性を哲学的に説明するための…象徴としての役割を果たしていた（渡辺 1985）、と結論づける。

つまり、個性化過程の目標は自己の誕生であり、その自己の原理的な象徴はマンダラ、つまり個人の全体性を現す神秘的円環であると断言する。そもそもユングは三位一体が不完全であり、マンダラや錬金術の研究で四位一体を主張し、たとえば、聖母被昇天をこの立場から歓迎したが、ユングにとってマンダラは四位一体を象徴するもので、全体性を説明し、個人の個性化を意味するものであった（青木1996）。

錬金術ⁱⁱⁱは、鉄や銅など卑金属を化学的な操作で金銀への変成を試みるもので、呪術的、宗教的な技術であり、ルネッサンス期のドイツのパラケルススに代表されるように、医薬治療的な側面をも有している。ユングは『心理学と錬金術』で錬金術師らは、金を生み出す化学的な操作での物質の変容過程に、個性化過程と呼ばれる人格の変容過程を投影していたと主張する。くわえて、ユングの高弟フォン・フランツは、ユングが研究した錬金術について、この方法（錬金術師たちの作業—オプス）が、患者に即興の曲や、絵画を用いて、内奥の無意識的な素材を目に見えるように外在化、つまりは物質化させるなかで無意識素材を意識化・結合させ、心の自然な変容を促す作業である（Franz 1979）、とし、この心的内容の物質への投影が、現在、心理療法の技法に用いられていると指摘する。その技法の1つが箱庭療法であり（加東2001）、周知の通り、コラージュ療法の発想の由来は箱庭療法にある。

土居（1988）は、絵画、造形、音楽表現など、それらは外界の物事の描写に適するか、それ自体が外界の事物の一部で、外にある見えるものが、内にある見えないものの比喩となり、これらが精神内界の表現であると述べる。この文脈からも、マンダラ・コラージュの表現は、個性化の象徴とされるマンダラ、さらに精神世界の表現であるといえよう。そして、今回、マンダラ・コラージュで用いた円、すなわちマンダラという形状もユングの個性化研究の根底にある、枠としての円の魔術的意味と個性化を表現するものと考えられる。

たとえば、アメリカのユング派の影響を受けたアートセラピスト、フィンチャーは、気づき、癒し、自己理解のためのカラーリング・マンダラ（マンダラ塗り絵）という方法の心理療法^{iv}を実践している。マンダラと称される伝統的な円形のデザインの描画は、思索的な実践、危機的状況の治療と創造力を促す行為であるとし、特に、塗り絵に伴う集中力と瞑想状態との類似、色の持つ意味を重視している（Fincher 2000）。これは塗り絵という方法であるが、前述したユング理論を踏襲したものと理解できよう。

つまり、円形というマンダラと同じ形の台紙は、色のみ

ならず、制作者が自ら選んだ具体的な写真切片やキャプションを用いたコラージュ表現を通して、より具体的な洞察を可能にすると推測される。この文脈においても、コラージュ表現を促す円の持つ力、円形台紙、すなわちマンダラ・コラージュの意義が見出せよう。

4.3 表現と構成、作業プロセス

佐藤（2004）は集団集合法コラージュに円形台紙を用いているが、「円形台紙は上下の決まりがなく…どこからでも参加でき、いかようにも制作・鑑賞できる」としている。今回の円形台紙を用いた試行も集団個人法でありながら、時計や季節のイメージ、上下を気にせずどこからも鑑賞できる多様な構成が見られ、四角い台紙（画用紙）を用いた制作より、自由な構成が可能であったようである。また、あらかじめ中央部に「自分」を貼ること指示するため、強く自身の内面に目が向けられながらも、より意識的な表現が促され、集団でのコラージュ実施で懸念される、無意識が過剰に流れ出てしまう作品の制作を意図的に回避できたと考えられる。

『現在』の作品では、嗜好、所有に関するもので自身を表現する傾向が多い。また、具体的な写真よりも、アニメーションが好まれ、マスコットやキャラクターなどやわらかい表現が多数みられた。これは、様々な想いを切片に投影しやすいためであろう。

一方で、多数の「将来は（自由に想像できるため）制作も楽しいが、現実生活となると自覚できていない部分が多いせいも難しかった」という意見からも、現在の自分を顧みられず、ほんやりした曖昧な切片が貼られたとも理解できる。ピンクの背景をハート型に切り取って使うなど、多くのかたちづくり切片は、表現しきれないものや、台紙の空白を埋めるために、あえて、一見、楽しそうな表現として用いられたのかもしれない。この場合、表現できない葛藤やジレンマが制作の妨げになることか懸念されるが、かたちづくり切片の多い者は制作後、イライラ感、身体愁訴が低減する（竹下・吉本2008）とされており、的確な切片で自らの思いを表現できなくとも、かたちづくり切片や曖昧な切片を用いて、コラージュを媒介とした表現、すなわち遊びとしての作業が自己治癒的に機能したとも推測できる。ここでは、制作者自身がシェアリングなどを通して、かたちづくり切片から、どのような気づきを得たかが重要になると思われる。

事例1は、台紙に自分を象徴するミッキーマウスやかわいらしいものが貼られる半面、「実は作品の裏が表だったりする…裏では自分が1人ぼつんとして、半笑いの自分が

いる。その笑いは本当の笑顔なのか、嘘なのか自分でもわからない」と台紙の裏に貼った切片を説明しており、明るく楽しく学生生活を送っている反面、敢えてそう振舞わなければならない自分を自覚しているようである。しかし、シェアリングでのこの説明は共感的に受け止められ、自分の意識する自分、他者から見られている自分について積極的な意見交換がなされ、作品をポジティブに受け止めることができた。

『10年後』の作品は「ペア」「同じものの羅列」が目立つ。ペアは配偶者、羅列は仲間や家族を示唆するものようである。女性性を象徴する入れ物（カップ、鍋など）、結婚や子どものイメージ、風景や住居の切片など発達段階に即した切片が多く見られる。事例2では、『現在』と『10年後』で台紙の空白部分に違いがありながら、全く同じ切片で位置を変えて貼った作品を完成させている。しかし、『10年後』は、より曖昧なイラスト、アニメーションの切片が目立ち、上下に空白が多いことから制作者が何を感じたかが興味深いところでもある。ただし、これらの作品は、『現在』を制作した後の、いわば練習後のものでもあり、慣れを配慮した上での作品の鑑賞も考慮すべきなのかもしれない。

作業プロセス（主にシェアリングで語られた内容として）については、言語以外の表現からも他者を知ることができる、知らなかった部分が表現されていた、視覚的に人の持つ個性をとらえることができた、言葉以外の表現でも十分に人を知ることができることを実感した、同じテーマで作成しているにも関わらず表現の形態が異なるのに驚いた、自分の作品でありながら、他者の意見や感想からそのような見方もあるのか、思ってもなかったことを指摘された、表現が自分の知らない面が見えたような気がした、などの意見があげられた。特に事例3は、この点について得る部分が多かったようで、「ほんやりしたイメージを直ちに言語化することは困難だが、コラージュ表現という非言語的表現を経た後の言語化は、作品を手がかりに自ら洞察し、どう説明するかという手続きを経るため、より容易になることがわかった」と述べている。これはコラージュを媒介とし、内面がより象徴的（言語表現よりも、もしくは、言語表現の前段階として）に示された結果とも考えられる。

5. 今後の課題

円形コラージュは解釈よりも、制作者の表現されたものを重視し、なんらかの気づきを得ることを目的としてい

る。ただし、今回は、事例検討を重視した探索的研究であることから、効果測定が実施されていない。SD法などの尺度を用いた客観的な理解、さらには制作者の内面に何が起こったかを知るための統計的な検討が求められよう。

コラージュ療法は開発後に、続々と手法や方法で実践されている。台紙での実践に限定すると、ハガキ（藤掛2007）、色画用紙、模造紙（入江・服部ら1999）などであるが、色画用紙の使用、画用紙の大きさ、形などの問題は、その効果や意味などが不明瞭なまま実施されている現状にある。ユングが提示した概念、さらに箱庭療法を経て、開発されたコラージュ療法において、マンダラ・コラージュで用いられる円という台紙がどれだけの意義と効果を有するのか、これもまた色画用紙や一般の画用紙などとの間で統計的な比較検討が今後の課題として求められよう。

引用文献

- 青木智子, 1996, ユング心理学とマリア, 立正大学社会学・社会福祉学論叢 29, 29-40
- 青木智子, 2000, コラージュ技法・療法の現状と課題, カウンセリング研究 33, 323-333
- 青木智子, 2001, グループにおけるコラージュ技法導入の試み～コラージュエクササイズを用いたグループエンカウンターと気分変容についての検討～, 日本芸術療法学会 32-2, 26-33
- 青木智子, 2005, 「コラージュ」実践の試み, 痴呆性老人を対象としたレクの検討, 東北文化学園大学医療福祉学部リハビリテーション学科紀要 1-1, 13-25
- 青木智子, 2008, 現在・未来の自画像を明らかにするためのマンダラ・コラージュ, 日本カウンセリング学会, 第41回大会発表論文集, 100
- 青木智子, 2010, 認知症患者へのコラージュ療法・回想法の試み—事例からアセスメントの可能性を考える—, 日本芸術療法学会誌 39-2, 6-19 (印刷中)
- Aoki, Tomoko, 2009, MANDARA Collage creation for self-understanding, International Conference on Asia Pacific Psychology, 214-215
- Capacchione, Lucia, 1990, Healing Your Life with Art/ 長谷川寿美訳, 1993, 絵の摩術 アート・ヒーリング—人生を癒す神聖な力をあなた自身の中から引き出す描画法, たま出版
- 土居健郎, 1988, 精神分析, 講談社, 184
- 藤掛明, 2007, ハガキサイズの台紙を使ったコラージュ療法について, 聖学院大学総合研究所紀要 41, 327-353

- Finicher, F., S., 2000, Coloring MANDALAS, Hamlyn, USA
- Franz., Marie-Louise von, 1979, Alchemical Active Imagination/ ユング思想と錬金術 —錬金術における能動的創造, 2000, 垂谷茂弘訳, 人文書院, 37-38
- 原智恵子, 2006, ナラティブ・アプローチによる認知症高齢者のコラージュ, 臨床描画研究 21, 133-150
- Heisig W. James, Imago Dei, C.G.Jung's Psychology of Religion, 1979/ 瀧瀬康兵, 渡辺学訳, 1985, ユングの宗教心理学, 春秋社
- 入江茂・服部令子・近喰ふじ子・杉浦京子・森谷寛之, 1999, 座談会・コラージュ療法の起源と発展, 森谷寛之・杉浦京子編, 現代のエスプリ「コラージュ療法」, 至文堂, 5-28
- Jung, C.G., 1944, Psychologie und Ubertragung/ 心理学と錬金術 I・II, 1976, 池田絃一・鎌田道生訳, 人文書院, 83, 139
- 菊池秋彦・豊嶋春香, 2006, 「自己」の諸位相から見たエンカウンター・グループと輪番法集団コラージュ輪番法集団コラージュの理論構築に向けて, 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要 4, 65-74
- 加東仁, 2001, ユングの思想と宗教心理学, 『宗教心理学の探求』, 島蘭進, 西平直編著, 東京大学出版会, 125-146
- 河合隼雄, 1982, 序論, 箱庭療法の発展, 『箱庭療法研究第1巻』, 誠信書房, vii-xvii
- 近喰ふじ子・河野貴美子・吾郷晋浩, 2008, コラージュ制作における身体内言語の脳内メカニズム, 心身医学, 48(7), 659-669
- 木村晴子, 1997, 箱庭療法, 創元社
- 岸井謙児, 2002, 色と枠による画面構成がコラージュ表現に及ぼす影響について, その1—台紙における色のコラージュ表現へ及ぼす影響, 日本芸術療法学会誌 33 (1), 22-29
- 中原睦美, 2000, 外科領域での末期癌患者への心理的接近の試み, 心理臨床学研究 18 (5), 433-444
- 西山喜文, 2000, 重症心身障害者へのコラージュ療法の試み—コラージュ療法の意義について, 心理臨床学研究 18 (5), 476-487
- 岡田康伸, 1984, 箱庭療法の基礎, 誠信書房
- 佐藤仁美, 2003, 看護教育におけるコラージュ活用の試み, 心理臨床学研究 21 (2), 167-178
- 佐藤仁美, 2004, 教育場面における「グループ・コラージュと連句」導入の試み, 日本芸術療法学会誌 35, 43-51
- 下山晴彦, 2008, 臨床心理アセスメント入門, 金剛出版
- 杉浦京子, 1990, コラージュ療法の事例とその精神分析的解釈の試み, 日本医科大学基礎科学紀要 11, 47-55
- 杉浦京子, 1991, コラージュ療法の治療的要因と特徴について, 日本医科大学基礎科学紀要 12, 21-28
- 杉浦京子, 1993, コラージュ療法の基礎的研究Ⅱ—表現特徴の発達に関するパイロット・スタディ, 日本医科大学基礎科学紀要 14, 11-34
- 杉浦京子・鈴木康明・金丸隆太, 1997, 集団コラージュ制作の効果—社会心理学的, 臨床心理学的考察—, 日本医科大学基礎科学紀要 23, 1-15
- 杉浦京子・鈴木康明・金丸隆太, 1996, 集団コラージュの自己開発的意義について—高齢者問題に関わる対人援助者の自己理解に用いた集団コラージュ—, 安田生命研究助成論文集第32号 (1996年度), 174-180
- Singer, D. G. and J. L. Singer, 1990, The House of make-believe/ 高橋たまき・無藤隆・戸田恵子・新谷和代訳, 1997, 遊びがひらく想像力—創造的人間への道筋, 新曜社
- 平敏裕・前原愛和・江頭有明・山崎富浩・照屋英太郎・今村義典・末永英文・池村久美子・小池正樹, 2003, 外傷性脳損傷に対するコラージュ療法の試み, 沖縄医学雑誌 41-4, 23-26
- 豊嶋秋彦・久米川浩子, 2005, エンカウンター・エクササイズとして輪番法集団コラージュの開発, 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要 2, 17-24
- 谷口敏代・原野かおり, 2004, 介護技術教育におけるコラージュ作成の効果 (1) —コミュニケーション技法を高める, 岡山県立短期大学部研究紀要 11, 1-8
- 山崎聖子・柳久子・奥野純子・永田映子・戸村成男, 2008, 要介護高齢者に対するアートセラピープログラムの内容とその効果の検討, プライマリ・ケア 31-1, 31-37
- 竹下美恵子・吉本弥須子, 2008, 看護短期大学生のコラージュからみるストレス傾向の分析, 愛知きわみ看護短期大学紀要, 4, 91-99
- Wilhelm, R. C. G. Jung, 1929, Das Geheimnis der goldenen Bulute, ein chinesisches Lebensbuch/ 湯浅泰雄・定方昭夫訳, 1980, 黄金の華の秘密, 人文書院
- Winnicotte, D. W., 1971, Playing and Reality/ 橋本雅雄訳, 1979, 遊ぶことと現実, 岩崎学術出版

脚注

- i) 当時ユングは軍医として勤務する戦争捕虜収容所の指揮官であった。気晴らしのために、毎朝、円を描き、気の向くままにそれらを念入りに仕上げたという (Jaffe『ユング自伝 I・II』河合ら訳 1972 みすず書房)。

これらの描画のいくつかは精緻な絵画として仕上げられ、後にユングはチベットの仏教徒がマンダラと呼ぶものと比較する。その時に、ユングは自分の描いているものが、ある普遍的なパターンの表現であり、秩序を作り出すことにかかわる根源的な元型パターンであることに気付く。この経験から、マンダラは秩序づけられた全体性の直観を表現する宇宙的な象徴であるとし、この目的とこのパターンを作りだすべく心の中で作用している元型的要因として「自己」という用語を選択した (Stein『ユング 心の地図』入江訳 1999 青土社 参照のこと)。

ii) 「個人的なマンダラは秩序を表す象徴であり、それゆえにマンダラは患者が主として心的に行き詰っている時や、新規まき直しを図っているときに現れる (Jung『アイオーン』1990 野田訳 51頁 人文書院)」つまり、

円形の台紙を用いるマンダラ・コラージュは、逆説的に現実を見つめさせる、すなわち新規まき直しをあえて促していると考えることもできよう。

- iii) ユングは錬金術師たちが「プリマ・マテリア」(第一質料)や「賢者の石」を常に想定し、それらが一般に「ニグレード」(黒化)、「アルベード」(白化)、「ルベード」(赤化)の順番で変容すると考えていたこと、変容の結末に「輝きとしての黄金の生成」や「理想としての王と王妃の結合」がメルクリウスの蛇のように予定されていることに注目する。そして、なぜこのような不可能なことを目指したのかを主に錬金術の研究対象とした。(『人間と象徴』上下 1975 河出書房を参照のこと)
- iv) www.mandalaassociates.com/index.htm アメリカにはカラーリング・マンダラ療法の組織がある

MANDARA Collage Possibility of the Self-understanding

Tomoko Aoki

Department of Occupational Therapy, Faculty of Health Science Technology,
Bunkyo Gakuin University

Abstract

One of my investigations in mental health care has been performed according to Capacchione's proposal (1996). as the creation of MANDLA collage (circle type collage) is applied for students to understand themselves and to share their images or ideas with attendants. Each student completes the collage on the themes of "Real Life" and "Me Ten Years Later (My Future)". Then, the context of collage work is shared. Through the collage creation process, a student clearly reviews themselves, recognizes current life scenarios and performs self-assessment, though he or she might be vague in recognizing these issues without this review, and is capable of seeing the future vision. At the sharing stage, students engage in verbal discussion to understand the implications of their future life by exchanging opinions and impressions with other attendants

Key words —— Collage-therapy, Mandara, Self-understanding, Symbol, Expression

Bunkyo Journal of Health Science Techology vol.2: 31-40